

プロジェクトの担い手としての多様な当事者参画の可能性
—大阪ヘルスケアパビリオンのトイレワークショップを通じて—
Possibility of Participation of Diverse People with Disabilities as Project Partner
—A Case Study of the Osaka Health Care Pavilion Toilet Workshop—

石塚裕子¹
Yuko Ishizuka¹

¹東北福祉大学共生まちづくり学部・博士（工学）・E-mail:yuko-i@tfu.ac.jp

本研究は、2025年の大阪・関西万博会場に建設された大阪ヘルスケアパビリオンの設計プロセスにおける、多様な障害当事者が参画したトイレワークショップを対象に会話分析を行った。

その結果、多様な参加者は、問題提議や依頼（要望）ではなく提案や質問を繰り返すことで、課題解決の共有化が行われていることが明らかになった。また、会話は各自の 카테고리を超えて展開されていた。建設的な会話が展開される条件として3つ提示する。一つは互いの特性やニーズを理解する機会と時間が必要であること。二つ目は障害特性に配慮した丁寧な情報提供である。三つめは、当事者をプロジェクトのパートナーとして検討する機会を創出することである。そうすることで、当事者参画の場は課題解決の共有化から共創へと発展する。

This study conducted conversation analysis of a toilet workshop where people with various disabilities participated in the design process of the Osaka Healthcare Pavilion built for the 2025 Osaka-Kansai Expo.

The results revealed that diverse participants resolved issues through repeated questioning and proposals. Furthermore, the conversation unfolded beyond each individual's specific characteristics. Three conditions enable constructive conversation: First, opportunities and time are needed to understand each other's characteristics and needs. Second, careful information provision that considers the characteristics of disabilities is essential. Third, opportunities must be created to engage participants as project partners. By doing so, spaces for stakeholder participation evolve from shared problem-solving to co-creation.

キーワード：当事者参加、多様性、担い手、ユニバーサルデザイン

Keywords : Participation of persons with disabilities, Diversity, Partner, Universal Design

1. 研究の背景

我が国のユニバーサルデザインのまちづくりは、80年代の住民参加のまちづくりと併走して、障害当事者の参加を重視して進められてきた。

住民参加のまちづくりにおける住民とは、武川¹⁾が指摘する地域生活において社会的障壁を感じることなく多様な活動ができる「強い市民」を対象としており、物理的にも精神的にも社会的障壁を感じ地域生活に困難のある「弱い市民」の参加

はあまり意識されてこなかった。このことは、内海²⁾による都市計画学会における「参加」の研究レビュー分析において、参加者の少数化、固定化への課題の言及はあるが、参加する市民の多様性については言及されていないことから明らかである。

同様にユニバーサルデザインのまちづくりにおいても、当事者参加とは、自立生活運動を牽引してきた身体に障害のある「強い障害者」の参加が主流であった。このため、見えにくい障害（知的、精神、発達障害等）の人や、難病者、医療的ケアを必要とする人など、より少数のマイノリティや、LGBTQ+といったこれまで社会的障壁が十分に認知されていなかった人など、「弱い障害者」の多様性を担保した参加には至っていない。また、これまでの当事者参加の場は、障害者団体の長が検討会に参加することで「障害者の意見を聞いた」という手続き論としての参加であったり³⁾、計画、設計案への意見の徴収という利用者（消費者）としての参加であったりと、地域の一員として、まちづくりの担い手としての参加には至っていない。

2. 先行研究

本研究と同様の問題意識を背景に、東京2020オリンピック・パラリンピックを契機とした、さまざまなプロジェクトにおいて、新たな当事者参加の場が設けられ、いくつかの成果が報告されている。

丹羽ら⁴⁾による成田空港の大規模改修では、調査から設計まで当事者参加のプロセスに重点を置き、障害種別ごとや、トイレやエレベーター、サインといった個別検証ではなく、空間全体を対象に検討し、当事者参加で建築ルールを定めるといった新たなアプローチがとられた。また、新国立競技場の建設では、最初の計画設計の仕切り直しを機に、「世界最高のユニバーサルデザインの導入を目指す」と業務要求水準書に盛り込まれ、基本設計段階から障害者の意見を反映して設計が進められた。基本設計段階で5回、実施設計段階で7

回、施工段階で8回のユニバーサルデザイン・ワークショップが実施された。個々の設備のモックアップ検証が実施され、これまでにない車いす席の分散配置や補助犬トイレの設置、知的、精神、発達障害者対応の休憩スペースの設置など、多くの成果をあげている⁵⁾。一方で、高橋⁶⁾は当該ワークショップの次の課題として「問題解決の共有化」を指摘し、ワークショップの魅力は、様々な障害者などの意見からの気づきであり、障害属性だけでなく、異なる生活体験をもつ人の意見の対立を知ることもあるという。自身とは異なる立場の人たちがどのような課題意識をもち発言するのか、その背景は何かを学ぶ場こそがユニバーサルデザインを推進する力になるという。

かつて中部国際空港の建設(1998-2005)にあたっては、障害者団体が業務委託という形で設計に直接関わり、当事者が主体となって検討組織をつくり運営した実績がある。まさに担い手としての参加であるが、この取り組みに続く事例はない。また当時関わった当事者の多様性には限り(視覚、聴覚、肢体)があり、「弱い障害者」の参加は実現していない⁶⁾。

3. 本研究の対象と目的先行研究

3-1. 研究対象と経緯

本研究の対象は2025年4月に開幕した大阪・関西万博(以下、万博と示す。)会場に建設される「大阪ヘルスケアパビリオン」(以下、大阪パビリオンと示す。)の計画、設計プロセスである。当該パビリオンは大阪府と大阪市が建設するもので、博覧会会場の中で政府館に次ぐ大規模なパビリオンである。筆者は、2025年日本国際博覧会大阪パビリオン推進委員会のユニバーサルデザインに関するエキスパートに2022年1月に就任しユニバーサルデザインのワークショップを監修した。

万博の会場整備にあたっては、2018年に大阪府が「ユニバーサルデザイン推進指針」を策定したが、当事者への意見徴収が行われていなかったり、

2021年7月に公益社団法人2025年日本国際博覧会協会（以下、博覧会協会と示す。）から公表された「施設整備に関するユニバーサルデザインガイドライン」（以下、ガイドラインと示す。）が、当時、最新基準である「Tokyo2020 アクセシビリティ・ガイドライン」の基準を下回っていたりなど、問題が噴出した。このため、障害者団体等の働きかけにより2021年12月から博覧会協会にユニバーサルデザイン検討会が設けられ、多様な当事者参加によるガイドラインの改訂が行われ、会場や主要なパビリオン、交通機関の整備において当事者参画の場が設けられた。大阪パビリオンは基本設計が着手された段階から、公益社団法人2025年日本国際博覧会大阪パビリオンが事務局（以下、事務局と示す）となって当事者参加のワークショップを始めた。ワークショップは2022年2月から開幕間際の2025年3月まで行われ計24回開催された。本研究はワークショップの取り組みが開始された2022年2月から2023年3月の期間を対象とする。なお、本研究でいう「当事者」とは、障害の社会モデルに基づく社会的障壁により不利や機会の喪失を受けている者のことをいい、身体障害者をはじめ知的・精神・発達障害者、LGBTQ+、医療的ケアが必要な人、外国人、子どもなどである。

3-2. 研究目的

本研究では、高橋⁵⁾が指摘している「課題解決の共有化」の場にフォーカスする。可能な限り多様な当事者が参加するワークショップを行い、その場において、どのように「課題解決の共有化」が行われるのかを具象化し、その可能性を明らかにすることを目的とする。リサーチクエスションは次の2点である。

- (1)異なる立場の人たちが、どのような会話のプロセスを経て課題解決の共有化が図られるのかを明らかにする。
- (2)異なる立場の人たちが、どのような立場から発言しているのかを明らかにする。

4. ワークショップの実施概要

4-1. ワークショップの全体像

参加者は表1に示すとおり、2023年3月末現在で21名の当事者が関わっている。本取り組みでは、委員会形式をとらず適宜、多様な当事者の参加をめざして行ってきた。当事者以外に、建築設計担当者、展示設計担当者、設備メーカー、関係組織（博覧会協会関係者など）が常時参加しており、2023年3月に「大阪ヘルスケアパビリオンUD推進チーム」として位置付けた。

表1 参加者と参加状況一覧

		2022						2023		
		3/8	3/14	3/25	6/15	8/25	8/29	1/30	2/6	3/29
1	A氏（手動車いす）	○						○		
2	B氏（視覚障害）			○	○					○
3	C氏（知的障害・親）		○							
4	D氏（電動車いす）	○	○		○	○	○	○		○
5	E氏（簡易電動車いす）	○	○		○	○	○	○		○
6	F氏（聴覚障害）		○		○	○	○		○	
7	G氏（高齢者・子ども支援者）		○		○	○	○	○		
8	H氏（精神障害・LGBTQ+）		○		○	○	○	○		○
9	I氏（視覚障害）		○		○	○	○	○		
10	J氏（視覚障害）	○	○		○	○	○	○		○
11	K氏（視覚障害）	○	○		○			○		
12	L氏（電動車いす）			○						
13	M氏（電動車いす）	○	○				○			○
14	N氏（簡易電動車いす）	○	○		○	○	○	○		○
15	O氏（聴覚障害）		○		○	○	○	○		○
16	P氏（精神障害）									
17	Q氏（発達障害・親）		○		○	○	○	○		○
18	R氏（LGBTQ+・車いす）						○	○		
19	S氏（医療的ケア本人+親）						○	○		○
20	T氏（医療的ケア本人+親（精神障害））						○	○		○
21	U氏（知的障害+親）						○	○		○

ワークショップの開催日、開催内容は表2に示すとおりである。大人数の会議では、視覚障害、聴覚障害の人が発言のタイミングを逃しやすい。このため本ワークショップでは、同じ内容で複数回の場を設けて十分な発言時間の確保を行っている。また、視覚情報に偏るオンラインの会議では、視覚障害者には事前に図面の立体コピーを郵送したり、対面会議では手で触れる簡易模型を準備したりするなど、可能なかぎり情報格差の是正を図った。

表2 ワークショップの内容

2022. 03. 08	基本設計への意見交換会 (オンライン) 10:00～移動① (車いす) 13:30～トイレ① (車いす)
2022. 03. 14	基本設計への意見交換会 (オンライン) 10:00～移動・トイレ② (視覚・聴覚) 13:30～カームダウン
2022. 03. 25	基本設計への意見交換会 (オンライン) (欠席者対応)
2022. 06. 15	意見交換結果踏まえた基本設計案の報告および展示方針の意見交換会 (オンライン)
2022. 08. 25	みんなのトイレワークショップ事前説明 (オンライン)
2022. 08. 29	みんなのトイレワークショップ
2023. 01. 30	トイレワークショップ結果の報告 (対面+オンライン)
2023. 02. 06	トイレワークショップ結果の報告 欠席者対応 (オンライン)
2023. 03. 29	展示ワークショップ

4-2. トイレワークショップ

(1) 着想の経緯

トイレについては、最初の基本設計への意見交換会(2022.03 に実施)において最も多くの意見が寄せられた。バリアフリートイレの設置数、大きさをはじめ、動線のわかりやすさや、LGBTQ+への配慮など多種多様な意見が寄せられた。ガイドラインでは、バリアフリートイレの整備水準や機能分散化をめざすことが明記されているが、待ち行列の問題など実際の運用面では解決できていない課題も多い。また、属性によってニーズのコンフリクトが生じるケースもある。例えば、LGBTQ+の人からジェンダーフリートイレの増設の要望がある一方で、視覚障害者からは男女共用とすることへの不安の声が聞かれるなどである。

これまでの検討の場では、専門家が作成した素案を提示し、その素案に対して、当事者がそれぞれの自身の立場から意見(要望)を伝えて、修正案を作成していくというプロセスがとられることが多い。このプロセスでは、すべての意見に対応するためには膨大な面積が必要になるなどの課題があり、すべてのニーズを満たすことは困難とな

り、設計者が取捨選択せざるを得ないケースが多かった。このように正解がない中で「成解」⁷⁾をみつけるプロセスを、多様な当事者自身が検討する場を設けることで、各当事者からの要望の場ではなく、問題解決の共有化の場とすることをめざした。

(2) トイレワークショップの内容

トイレワークショップの流れを図1に示す。最初にトイレメーカーのラボを借用し、複数タイプのトイレ空間を実寸大で体験してもらった。これは障害種別ごとに行った。次に、多様な当事者の混合チームでトイレ案の検討を行うこととした。基本設計で確定したトイレの位置、全体面積と空間の形状のみを制約条件とし、白紙の空間に各種トイレの配置、数、動線について当事者自身で検討してもらうこととした。専門家ではない当事者が検討しやすいように、大きさや機能の異なるトイレブースや洗面台等のパーツを用意し、福笑いのように配置して検討するツールを用いた(図2)。検討の目安として、想定来館者数から推測した必要機器数(大便器10個(車いす使用者用等を含む)、小便器4個、手洗器7個)を示した上で、パーツとしては、表3に示すものを準備し、足りない物、ない物は自由に書き足してもらうことにした。各グループには、ファシリテーター役となる事務局の他に、建築設計者やトイレメーカーの専門家も参加した。

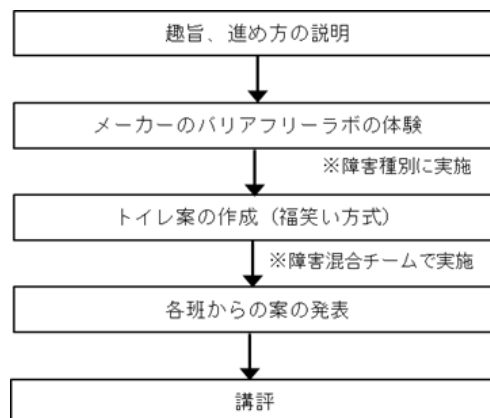


図1 トイレワークショップのながれ



図2 トイレワークショップツール
(福笑い方式)

表3 用意したパーツ

○便器
・一般便房 (2種類)
900mm×1, 800mm
1, 000mm×2, 100mm (大きめ)
・小便器
・車いす使用者用便房
2, 400mm×2, 450mm
(大型ベッド、オストメイトが入る大きさ)
・車いす使用者用簡易型便房 (2種類)
1, 700mm×1, 900mm (オストメイトが入る大きさ)
1, 600mm×2, 100mm
(おむつ替え、フィッティングボードが入る大きさ)
○その他設備・機能
・手洗い
・乳幼児連れ配慮設備
(授乳室、おむつ替えベッド、キッズトイレなど)
・掃除用流し

5. 分析方法

ワークショップでの会話を発話の連鎖関係の基本である隣接ペアと参加者のカテゴリーに着目して、会話分析を行った。また会話のテーマの変遷にも着目する。

隣接ペアとは、会話は異なる話者による隣あった発話の対であるという考えのもと、第一部分 (first pair part) と第二部分 (second pair part)

という順があり、第一部分が決まった種類の第二部分を要求するという理論である (表4)⁸⁾。また、人は複数のカテゴリーに属するが、発話において「何者として」話して、聴いているのかということが会話に影響する⁸⁾。この理論に基づき会話の数 (隣接ペア数) とタイプを集計した。分析対象は3グループ、21人の会話である。それぞれの参加者の属性と役割を表5に示す。

表4 隣接ペアの例

第1部分	第2部分
質問	回答
提案	同意/不同意
問題提議	同意/不同意
依頼 (要望)	承諾/拒否
評価	同意/不同意

(注)参考文献⁸⁾P25を参考に、筆者が一部加筆

表5 参加者の属性と役割

班	略称	個人属性、役割
A班 (6名)	ア	電動車いすユーザー、ファシリテーター
	イ	精神障害者、LGBTQ+移行者、女性
	ウ	視覚障害者、女性
	エ	医療的ケア児の母親、女性
	オ	男性、事務局、ファシリテーター
	カ	女性、専門家(メーカー)
B班 (8名)	サ	女性、行政職員、ファシリテーター
	シ	医療的ケア児 (男性) とお母さん
	ス	女性、高齢者・子育てサポーター
	セ	難聴者、男性
	ソ	電動車いすユーザー、男性、ファシリテーター
	タ	女性、行政職員
	チ	女性、専門家 (メーカー)
	ツ	車いすユーザー、LGBTQ+、男性
C班 (7名)	ナ	女性、事務局、ファシリテーター
	ニ	知的障害のある人の父親、男性
	ヌ	発達障害のある人の母親、女性、ファシリテーター
	ネ	中途失聴者、女性
	ノ	車いすユーザー、自閉症のある人の母親、女性
	ハ	視覚障害者、男性
	ヒ	女性、専門家 (メーカー)

6. 結果

会話の隣接ペアはA班で55ペア、B班で49ペア

ア、C 班で 39 ペアであった。会話のテーマは時系列に、A 班では「ジェンダーフリー化」、「キッズエリア(授乳室・オムツ替含)」、「空きブースの案内」、「手洗い場の配置」、「待ち行列」、「給湯室」、「狭いトイレ」と展開された。B 班では「空きブースの案内」、「車いすトイレの配置」、「ジェンダーフリー化」、「手洗い場の配置」、「男性小便器」、「キッズエリア(授乳室・オムツ替含)」、「カムダウンルーム」、「通路幅」、「動線」、「個数」であった。C 班は「車いすトイレの配置」、「空きブースの案内」、「ジェンダーフリー化」、「手洗い場の配置」、「キッズエリア(授乳室・オムツ替含)」、「サイン・エリア表示」となった。

3 班共通して話し合われたテーマは、「ジェンダーフリー化」、「キッズエリア(授乳室・オムツ替含)」、「空きブースの案内」、「手洗い場の配置」であった。各テーマの隣接ペアのタイプと数、発言数、発話者のカテゴリ外での発話数の一覧を表 6、図 3 に、4 つのテーマのうちジェンダーフリー化に関する発話内容を表 7 に示す。カテゴリ外での発話とは、表 5 に示した個人属性の立場からではない発言のことを意味し、表 7 では「—」として示している。

従来の専門家が作成した素案を提示し、その素案に対して、当事者がそれぞれの自身の立場から意見(要望)を伝えて、修正案を作成していくというプロセスに対して、本ワークショップでは、多様な立場の当事者が、依頼(要望)ではなく、質問と提案を繰り返していることが明らかになった。ジェンダーフリー化では、質問が 33.3%、提案が 38.1%を占めるなど、いずれのテーマにおいても質問と提案が会話の 7 割以上を占めた。特に空ブースの案内では質問と提案が 90%以上を占め、依頼(要望)はない。また、参加者それぞれの個人属性を超えて、自身とは異なる他者の立場に立ったり、俯瞰的に又は客観的に発言する割合は、ジェンダーフリー化、キッズエリア、手洗い場の配置において 20~25%を占め、空ブースの案内では半数を占めている。空ブースの案内については、自分

たちで考えたトイレの配置プランを元に、案内の仕方を考えているからではないかと考えられる。

表 6 テーマ別隣接ペア数

対話のテーマ (隣接ペア数)	隣接ペアのタイプ				総発言数	カテゴリ外での 発言数	その割合(%)
	質問	提案	問題提議	依頼(要望)			
ジェンダーフリー化(21)	7	8	5	1	42	9	21.4%
キッズエリア(17)	6	7	2	2	34	8	23.5%
空きブースの案内(12)	6	5	1	0	24	13	54.2%
手洗い場の配置(14)	5	7	1	1	28	7	25.0%

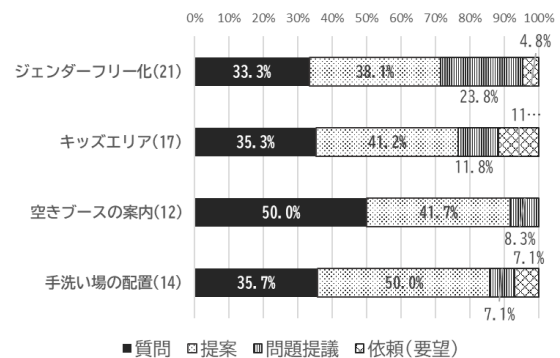


図 3 テーマ別隣接ペアのタイプの割合

7. 考察

本稿では大阪・関西万博の会場に建設された大阪ヘルスケアパビリオンのユニバーサルデザインに関するトイレワークショップを対象に、肢体不自由(車いすユーザー)、視覚障害、聴覚障害、精神障害、知的障害、発達障害、LGBTQ+の人など、多様な属性の当事者たちが、どのような会話プロセスを経て課題解決の共有化が図られているのか、また、どのような立場から発言し意見交換しているのかを明らかにすることを目的とした。

その結果、質問と提案の会話を繰り返す過程で課題解決の共有化を図っていることが明らかになった。また、自身の個人属性を超えて会話が行われていることも明らかになった。このような会話による課題解決の共有化が実現できた要因として、以下の 3 つが考えられる。

一つは、複数回のワークショップを開催することにより、各当事者のニーズをお互いに確認、共有できる時間が充実していたことである。分析の

表 7 ジェンダーフリー化に関する発話内容と隣接ペア

発話者	発話内容	班	隣接ペア	発話者のカテゴリー
イ	今回新しいオールジェンダーのトイレを作るならどんなトイレがいいかっていう取り組みを私はここでしたいなと思います。私なんかは、ずっとセクシャルマイノリティのコミュニティで生活していたので。オールジェンダートイレやったら恥ずかしいわとか、率直な意見を聞かせてもらってどんなトイレやったら安心してオールジェンダーで、安心したトイレを作れるか実験的に配置してみたいと思うのですがどうでしょうか。	A班	(1)提案	LGBTQ
ア	いいと思います。皆さんの意見も聞いていきたいと思うので。ウさんどうですか。		(1)同意	ファシリ
ウ	私は女性トイレに入ることが多い。オールジェンダートイレが出来た時に男性の声が聞こえると驚くこともあると思う。		(1)不同意	視覚障害・女性
ウ	トイレはプライベートな空間なのでそのあたりをどう配慮していくか。		(2)問題	女性
イ	確かにちょっと恥ずかしいなって思うようなことかびつくりするようなことってありますよね。トイレとトイレの間の壁はのぞき防止するために上から下まで壁にしたり、防音に配慮したりするとも思います。それでも同じ空間でウさんにとって男性の声が聞こえてびつくりするっていうのは、あるかもしれないですね。		(2)同意	女性
エ	こちらのチームが考えるのは男性用トイレ、女性用トイレではなくオールジェンダートイレを考えたら良いのですか。		(3)質問	医的ケア児の母親
オ	各班に任せます。		(3)回答	事務局
ア	オールジェンダートイレはどう思いますかということ。		(4)質問	ファシリ
エ	いさんおっしゃるようにこんなふうにトライアルできるチャンスはないので、やってみたいなと思います。		(4)回答	医的ケア児の母親
イ	全個室化するのはどうですか。		(5)提案	LGBTQ
オ	ウさんに聞きたいんですが、視覚障がい者の方は1人でトイレに行かれた時に並んだりするのはどうされているんですか。		(6)質問	ファシリ
ウ	どこに入るかが1番の大問題。間違えたら大変。		(6)回答	視覚障害
イ	いさんが空いているかわかったら入れるということですか。		(7)質問	—
ウ	男性、女性とわかれていますか、そこさえ間違えなければ、どこに入ってもいいだろうと思いついてあえざるみたいなの。		(7)回答	視覚障害・女性
イ	オールジェンダートイレでは小トイレも個室にするという事例もあると聞いていますが。	(8)提案	LGBTQ	
ウ	小トイレですか？	(9)質問	視覚障害・女性	
イ	小トイレはいらないと思う。しかし、男性が大便器を座らずにすると床に飛び散るから嫌って言う意見が前にあったんですよ。	(9)回答	—	
ア	いや俺も座ってやるけども、古い人やったら、立ってやりたいっていう人も中にはいるやろうと思う。	(8)同意	男性	
ア	全部オールジェンダーにすると、例えば並ぶ時に男女が一緒になったり、同じ便器使うのが嫌やとか聞いたことがあるんだけど、その辺はどうなんですか。	(10)質問	男性	
イ	男性は汚しやすいから嫌っていう意見があったけど、使う前にひと拭きしたらいいかなっていうぐらいの感覚ですね私は。	(10)回答	LGBTQ	
エ	スイスで見た便器がすごく、便座も床も自動で清掃してくれるのを見たことがあります。そういう技術を導入したよいのではないですか。	(11)提案	—	
イ	それはすごい案ですね。自分の手を汚さずに済むし。	(11)同意	—	
オ	男性の後に女性入るの嫌だっていうのは技術で何かカバー出来るかもしれないですね。	(11)同意	ファシリ	
ア	バリアフリートイレで結構、汚れていることがある。入って汚れていけないことあるんです。	(12)問題	車いす	
オ	でも、もしかしら障がいのために頑張っても汚してしまったのかも。	(12)不同意	医的ケア児の母親	
ア	結構ね、僕が入る時は残念なときはある。自動で清掃してもらえたら嬉しい。	(13)提案	車いす	
エ	多分全員ハッピーだと思います。便器が自動で綺麗になるのは。	(13)同意	—	
オ	A班はとりあえず、ジェンダーフリーな案を作った清潔について課題を添えるみたいな方向ですね。	(14)提案	ファシリ	
サ	男女分かれていないトイレがいいのではないかと提案と、多目的トイレを使いたくないが個室を使いたいという意見がありますツさん、どうですか。	(6)質問	ファシリテーター	
ツ	トランスジェンダーの人は個室、普通の大ききのトイレが男女別なく並んでたらそれでいい。	(6)回答	LGBTQ	
シ	ユニバーサルトイレも含めて男女分けずに配置するトイレのスペースを確保したうえで男女に分かれるトイレもあっていいんじゃないか。	(6)同意	—	
ス	限られたスペースしかないですね。男女別にする方がいいのか、しなくてもみんなが使えればいいのか、別のところで男女別にするのがいいのか、ちょっと迷っています。	(7)問題提議	—	
シ	結構大きな知的障がいのある子(男)にお母さんが介助者でついてこられるケースがある。また、お父さんが女の子をトイレに連れて行かないといけないというシーンもある。そんな視点から考えると確かに男女分かれていないトイレっていうのがいいのかなって思う。しかし、女性から考えたら自分が用をたすところに男性も入ってくるっていうのにはやっぱり抵抗感がある人もいます。スペースが限られている中で両方を満たせるいいアイデアないのかな？	(7)同意	医療的ケア児の母親	
セ	男女別がいいと思う。宗教的な問題もあると思う。日本だけじゃなく海外からお客さんが来るので宗教的な問題で男女別にした方がいい、そういうエリアがあった方がいいと思う。	(8)問題提議	—	
シ	誰でも使えるエリアとして、キッズとか授乳室みたいなお母さんお父さんたちが男女どちらでも入ってもいいエリアと、男性、女性に分かれているエリアを配置すると、全部満足するのはないか。トイレが何個必要なのかはまたみなさんで考えたらいいなと思います。	(8)同意	—	
ニ	僕は男性ですが息子が個室に入りたいので、バリアフリートイレに男性(同士)で入れるところがほしい。ただし、妻の場合は異性ペアになるので真ん中には誰でも入れるところがあると便利なんです。広いブースは男女別ではなく誰でも入れるところにほしいと思います。	(8)依頼	知的障害のある人の父親	
ノ	誰でも入れるトイレを真ん中にして、左右両方通路を確保しようと思ったら真ん中に並べることができるパーツが限られてくる。取捨選択して何を真ん中に並べるかっていうのをちょっと考えなアカン。	(8)承諾	車いすユーザー	
ヌ	完全に男女共用だと女性には男性が使った後、入りたくないっていう人が多い。手前は男女問わず入れるエリアにし、この後ろには男女別のエリアを設けてはどうか。	(9)提案	女性	
ノ	私も又さんの意見は賛成で、家族でもない男の人が後ろで並んでいるよっていう時にトイレは使いたくないですね。男女共用は慣れの問題もあるんですけど、従来型のゾーンを少しは残した方がいいのではないかなと思います。ハさん意見ありますか。	(9)同意	女性	
ハ	今までのトイレは男性用の入口と女性用の入口があったから、男性用を探して入っていたわけですが、男女共用のトイレになると、まずその入り方をどうするのかなというところを決めていかないといけないと思うのですが。	(10)問題提議	視覚障害、男性	
ヌ	入り方という点ですが、多様な人たちがいらしゃる、例えばLGBTQの方であるとか、発達障がいのある人の中には異性同伴でないと入れない、でも見た目に障がいがあることがわからないから、異性同伴で入ることにはすごく変な目で見られたりということがあります。そういう視点から考えると入口はみんな同じ、出口もみんな同じに。ただエリアでその通路を左に行くか右に行くかでそこが男性用と女性用に分かれているというのではないかな。先ほどノさんも言っていたように男性のところに女性が入るってなかなか抵抗があると思うのでエリアを分ける。	(10)同意 (11)提案	発達障害のある人の母親、女性	
ニ	高速のサービスエリアは入口は共用で多目的トイレが並んで、右に行くとか例えば女性、左に行くとか男性っていうトイレを見かけるので、そのようなイメージかなと思う。入ったところは多目的トイレがずらっと並んで、男女誰でも入れるトイレがあって、それから先が男子用、女子用に分かれてるってゆうイメージですけど。	(11)同意	知的障害のある人の父親	

対象としたトイレのワークショップを行う時点で、当事者同士が相互の特性やニーズを理解していた

ことが、質問や提案という建設的な会話を可能にしたと考える。二つめは、情報の保障である。聴覚障害者に対して手話通訳や文字情報の提供は当然のことであり、視覚障害者に立体コピーや模型を用いて図面情報の共有を行った。そして情報を取得するための十分な時間を確保することも重要であった。また、トイレメーカーの協力により機器の実物の確認や実寸大での空間確認は、図面から空間把握が難しい当事者にとって情報を保障することに寄与した。そして、トイレのパーツを用いて、自由に組み合わせて検討するツール（福笑い方式）を用いたことは、多様な当事者の情報を保障し、検討することへ対等性に寄与したと考える。

三つめは、当事者自身をプロジェクトの担う手として扱い、白紙の段階から検討に参画したことである。建築の専門家が素案を作成したものに利用者の立場から意見をするのではなく、パビリオンを共に作る担い手として、自らトイレのプランを考える場としたことで、限られた空間において、各自の理想の解ではなく、さまざまなニーズに折り合いをつけ、一つの空間として成り立たせる解を見つけるプロセス(会話)が成立したと考える。

8. 完成したトイレと今後の課題

ワークショップの検討結果を受けて完成したトイレは「みんなトイレ(Inclusive Toilet)」と名付けられた。入り口は1ヶ所とし、正面に機能分散させた3種類の大きさのブースが計8カ所設けられた。男女別ブースは最小限のスペースで設けられ、参加者からは従来のトイレのマジョリティスペースとマイノリティスペースが反転したトイレであると表現された。入り口にはコンセプトボードが掲げられ、利用者にも検討プロセスが共有された(図4)。

利用者による評価は会期中にアンケート調査を実施したり、各ブースの利用のログなどによる検証を行う予定である。

今後の課題としては、建物の設計プロセスだけ

でなく、運用といったソフト面においても多様な当事者がプロジェクトの担い手として参画するためにはどのような参加の場のデザインが必要か検討していく必要がある。



図4 みんなトイレのコンセプトボード

謝辞

ワークショップの準備、運営は、すべて一般社団法人 2025 年日本国際博覧会大阪パビリオン展示・建築グループの方々の尽力によります。この場をかりて心より感謝申し上げますとともに、取り組みに敬意を表します。また、ワークショップに熱心に参加いただいた障害当事者のみなさまにもお礼を申し上げます。

参考文献

- 1) 武川正吾、地域福祉の主流化、pp. 60-66、法律文化社、2006
- 2) 内海麻利、都市計画における「参加」の諸相—都市計画学会学術研究論文を素材として—、自治体学 Vol. 30-2、pp. 43-50、2017
- 3) 星加良司、当事者をめぐる揺らぎ—「当事者主権」を再考する、支援 Vol. 2、pp. 10-28、生活書院、2012
- 4) 丹羽菜生、丹羽太一、原利明、秋山哲男：日本の国際空港で行われてきた障害当事者参加に見るインクルーシブな設計計画とは、福祉のまちづくり研究第 23 巻 1 号、pp. 36-40、2022
- 5) 高橋儀平：福祉のまちづくりその思想と展開「第 6 章 東京 2020 オリンピック・パラリ

ンピック競技会とユニバーサルデザイン、pp。
184-202、彰国社、2019

- 6) 谷口元、磯部友彦、森崎康宣、原利明：中部国際空港のユニバーサルデザイン、鹿島出版会、2007
- 7) 矢守克也、吉川肇子、網代剛：防災ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション - クロスロードへの招待、ナカニシヤ出版、2005
- 8) 高梨克也：基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法、ナカニシヤ出版、2016